

スバドラの子 (Saubhadra)
別名アビマニュ (Abhimanyu)
1章6節

アルジュナとスバドラ (クリシュナの妹) の息子。若くして非常に優れた戦士で、知略にも優れていた。
チャクラヴィューハ (戦術陣形) に単身突入し、壮絶な戦死を遂げる。マハーバーラタでも屈指の感動的な場面。
まだ少年に近い年齢ながら、恐れを知らず戦場へ突入していく。
複数の敵 (カルナ、ドゥシュアーサナ、シャクニの子など) に囲まれ、不正な戦い方で討たれる
若干16歳のアビマニュ。父アルジュナがいない間、彼は最も複雑で危険な陣形「チャクラヴィューハ」に、
自分一人で突入することを決意します。周囲の將軍たちは止めました。
「父のいないときに黙って見ているような者は、息子とは言えない。」
彼は自分が“抜け道を知らない”ことを知っていました。
でも、「突破するまで戦えばいい」と——不可能に挑む覚悟を、幼さではなく誇りで見せた。
最後はそれでもなお「僕はまだ終わっていない」と目を燃やして立ち向かう。
最後の最後まで、“この命には意味がある”と信じて。
妻ウッターラーの胎内には、アビマニュの子どもが宿っていた。
後に生まれたパリークシットは、アシュヴァッターマンの攻撃によって胎内で殺されかけますが、クリシュナが助ける。
命は終わっても、愛と義は受け継がれていく
という、マハーバーラタ全体の希望をつなぐ“光”がアビマニュ

ドラウパディーの子たち (Draupadeyāḥ)
1章6節

パーンダヴァ五兄弟とドラウパディーの間に生まれた5人の王子。
それぞれの父にちなんだ名を持つ (プリヴィンドヤ、スータソーマ、シュルタケールティ、シャタニーカ、シュルタセーナなど)。
戦では勇敢に戦ったが、物語の終盤、アシュヴァッターマンによって無念にも暗殺されてしまう。

ビーシュマ祖父 (Bhīṣma)
1章7節

両陣営の祖父。パーンダヴァ (義の側) にもカウラヴァ (敵側) にも、平等に愛情を注いだ。
自らは王位を継がず、結婚もせず、子を持たず、王家に一生忠誠を尽くす誓いを立てる
アルジュナに矢で射抜かれたが「望む時まで死なない」という祝福 (イッチャー・ムリトユ) **によって、すぐには死なない
自分が望むまでは死なないという呪い。アルジュナの矢の上に横たわっているかのようだった。
愛するものと戦わないといけないアルジュナの気持ちを痛いほど理解するその姿は攻撃されたのではなく、まるで攻撃をうけいれてるか
のように矢の上に横たわっているように見えた。
彼の死と共に一つの時代が終焉した。